

# 日本語教育討論会

To teach, or not to teach, that is the question.

<キーワード> 文法積み上げ式・Can-do・学習者中心・  
Task-Based Language Teaching

2018年1月21日(日) 13:30~17:00

早稲田大学早稲田キャンパス【11号館606教室】

司会:南浦涼介(東京学芸大学)



「第二言語教育とその教員養成  
においてTBLTというアプローチが  
示唆すること」

百濟正和(イギリス・カーディフ大学)



「日本語教師の専門性としての  
学びへの感受性は育成できるのか」

古川嘉子(国際交流基金日本語国際センター)



「寺子屋式アクティブ・ラーニング  
への回帰」

今井新悟(筑波大学)

申し込み不要:当日、直接会場にお越しください。  
お問い合わせ:monthly@alce.jp(月例会委員会事務局)

## ■ 趣旨 ■

何をどう教えるべきなのか、いわゆる教授法は長きに亘り、栄枯盛衰を繰り返して来た。そしてその変遷は今後も続くだろう。よりより教授法という問いは、終着点のないオープンクエスチョンであろう。そして、それは日本語の教授法という限定された範囲に収まることではなく、「教える」「学ぶ」という営為によって文化・文明を繋いできた、人類の存在方法の根幹にかかわることなのだろう。その中で、「学校、教師、教室、学習者、教科書」という設定を伴う「教育」の在り方について、登壇者らは、今、明らかな変化が訪れていることを肌で感じている。イギリスの大学で、日本の大学で、そして世界によき日本の理解者を増やすことをミッションとする機関で、それぞれが最先端、最善と（多分に勝手に）自認して、教育の最前線に立って実践を重ねている3人が、自己主張と他者批判の先にあるだろう何かを目指して、妥協なき議論に挑戦する。

### ◆百済:「第二言語教育とその教員養成においてTBLTというアプローチが示唆すること」

第二言語習得研究の影響から文法・句型中心の言語教育アプローチが批判的な評価を受ける中、機能中心の言語教育アプローチが注目され、日本語教育の現場ではCan-doによる記述が使用され始めている現状がある。登壇者（百済）は、どちらのアプローチも言語教育の目的という点では変わりなく、Can-do記述に対する日本語教師の関心がむしろ、日本語教育が何を指すのかという議論を曖昧にする可能性があるかと危惧している。本パネルディスカッションでは、まずTBLT（Task-based language teaching, タスク主導の言語教育）がどのような教育的価値を土台に実践されているのかという点を明らかにしながら、そこから示唆される教員養成についても議論したいと考える。

### ◆古川:「日本語教師の専門性としての学びへの感受性は育成できるのか」

日本語教師の仕事は、「教える」現場での学ぼうという人の学びを構想し、学びのプロセスをデザインし、教育実践の中で学びをファシリテートしていくことである。学びのプロセスのデザインでは、「何を」という内容と「どうやって」という方法にかかわる選択を行う。内容のデザインは、学ぶ人がどのような背景を持ち、何を求めているかを考慮し、教育実践でどのような項目を扱うかを決める。Graves（1996）は「完全なシラバス表」として、文法、課題、スキル、話題、学習能力、コンピテンシーなどを挙げているが、21世紀の言語教育では、さらにそれが拡張していると考えられる。そして、方法の選択肢も多様である。日本語教師の専門性は、可能性の中から妥当な選択をし、有意味な教育実践を行っていくことにある。そして、その妥当性と有意味性を支えるのが、学びのプロセスに対する教師の感受性だと考える。教師教育においては、そういった専門性の育成をどのように図っていったらよいか検討したい。

### ◆今井:「寺子屋式アクティブラーニングへの回帰」

21世紀型スキルの必要性と共鳴するかのようになり、日本語教育でも文法・句型の知識伝達を主とした教え方が批判されて久しい。文法積み上げ式に対するアンチテーゼが理論、実践、教材のそれぞれのレベルで提案され、徐々に現場に浸透しつつある。しかし、その動きは鈍く、日本語教育の現場で全面的なパラダイムシフトを起こすまでのうねりは感じられない。今日も世界のどこかで日本語教育の世界に足を踏み入れる若き教育者たちの多くは、知識伝達型の呪縛から逃れることができず、色々な言い訳で己を慰めている。まるでそれが教育のオーソドックスとなっているかのごとくに。しかしながら、知識伝達型教育の歴史は思われているほど長くなく、その基盤も盤石ではない。画一化された知識伝達型マス教育の手法は、少なくとも日本においては明治以降に輸入されたものであり、それ以前は、個を尊重するアクティブラーニングが寺子屋などで行われていた。いまや、画一的教育による学びの非効率性は自明であり、教育のパラダイムシフトは世界中で起こっている。日本語教育においても、個を尊重する、学習者の、学習者による、学習者のための学びを推進すべきときではないか。そのためには、教師は自ら舞台から降り、黒子に徹する勇気を持たなくてはならない。学習者のよりよい学びを阻害しないために。